

第四章 ドイツ外交政策の批判と具体的提案

したがって国内政策の課題が——当然のことながらいわゆる日常の問題を充足させることだということとはさておいて——民族の持つ内的価値を計画的に保護し、かつ高めることによって、民族統一を鍛錬し強化することではなければならないとすれば、外交政策の課題とは、民族統一を内部から訓練する作業を、外部に隠し、また生存の一般的前提条件を生み出し、かつこれを確立するのを手助けすることである。その場合健全な外交政策とは、民族の食糧確保に必要となる基本条件を入手することを、常に確固たる最終目標としてとらえるものでなければならぬ。つまり国内政策とは、民族の外交政策上の主張ができるよう民族に内的な力を確立し、外交政策とは、民族が国内政策を展開するために民族にその生活自体を確保するものなのだ。だから国内政策と外交政策とは、このうえもなく密接に互いにかかりあっているところか、互いに補足しあつて作用すべきものである。人類の歴史という大いなる時の流れにおいては、

「民族の食糧確保」

国内政策でも外交政策でも、今述べてきた以外の原則にそつて行われた事実はあるが、それが正しかったという証明になるわけではなく、むしろそこではそういう行為が間違っていたといふことが、立証されるに過ぎないのだ。前に述べた基本的原則を守らなかつたばかりに、われわれにとつて警告的な例ともなる無数の民族や国家が滅亡したのである。生きている中で、人間が死の可能性について考えることがいかに少ないかということ、注目に値するものがある。また人間は個々のケースをとりあげてみても、生存について、無数の先人たちがずっと昔にやらねばならなかつた、またどんな人間でもよく知っている経験に合せて考えることが、いかに少なくなつたことか。こういうことを頭にとめ、その人格の価値によつて、過去の経験を土台とした生活の掟を仲間の人間に守らせようとする者は、常に例外的存在でしかないのだ。こういう場合の注目すべき例として、結果的には民族の繁栄につながるのだが、一つ一つをとると煩わしい数多くの衛生上の措置の話をあげてみよう。こういう措置は、個々の人間の専制的意義の力で、公衆がこれを守るよう押しつけられるべきもののだが、一旦個人という權威が民主主義という大衆の妄想にとつてかわられるやいなや、すぐさまその場で立ち消えになってしまうのだ。平均的人間は死に対し最大限の恐怖感を持っているくせに、実際にはほとんど死ということ自体を考えていない。が、卓越した人間は、死ということに強烈に心を奪われているにもかかわらず、それを少しも恐れはしない。すなわち片方の者は、やみくもに無為に日々を

過ごし、そして罪をおかし、ある日突然、死という全ての征服者の前でくすおれるのだが、もう片方は死が訪れるのを注意深くとらえ、とにかくそれを受け入れ、これを静かに見つめるのである。

民族の生存という問題に関しても、それとまったく同じことがいえる。人間にはいかに歴史から学ぼうとする姿勢が欠けていることか。いかに無頓着に自らが愚かにも、自分にしてきた経験を、単にまたいで通り過ぎてしまっていることか。その過ちのせいで今までに幾つもの民族や国家が滅亡し、そのうえこの地上から消え去っていったかという事実をまるで頭にとめることなく、いかに軽率に過ちをおかしているかを知ろうとしないか、を見るとぞっとすることが一度や二度の話ではないのである。とにかく、なんと人類は、今われわれが歴史的に把握できるといえる規模にまで発展したあげく、二千年後には跡形もなく消滅してしまっているという事実、幾つもの世界的強国が、文化圏を支配してはいたが、今となってはその巨大都市が廃墟と化したという伝説しか残っていないという事実、現在の人間にとっては、少なくともその本拠地を示す瓦礫の堆積がかるうじて残されているだけという事実を心をとめようとしないうことか。だが、生ける個体としてこれらの出来事の担い手であり、犠牲者であった何百万人という人間一人一人が持っていた憂慮、辛苦、苦悩は、今やほとんどわれわれの考えからかけはなれてしまっている。歴史上の無名の人々、無名戦士たちがそれである。そして実のところは今、いかに無関心であることか。永遠の樂觀主義がいかに根拠のないことか。故意の無知、直視したがらぬ者、学習意欲なき者たちが、いかに破滅を呼ぶものとなることか。一般大衆次第であるならば、子どもの未知の火遊びはまた、このうえもなく広範囲にわたって絶え間なくくりかえされるであろう。だからこそ民族の教育者として招聘されたと自覚する人間は、大衆の物の見方、理解の仕方、無知あるいはまた拒否には目もくれず、歴史から学びとりそしてその知識を今や実地に役立たせることを、その責務とすべきなのである。人間の偉大さとは、一般に広まっている有害な考えに對抗して、自分のもっとよい見識を一般の勝利へ導こうとする勇氣が大きければ大きいほど、ますます意味のあるものとなるのだ。その勝利は、克服しなければならぬ抵抗が激しければ激しいほど、またその闘争が何よりもまず勝目がないと思われればそれだけ、ますます大きな勝利となって現れてくるのである。

国家社会主義運動が、もしこれに過去の経験から学ぶ勇氣がなかったり、あらゆる抵抗をもつともせずその経験の中に現れている生存の掟を、ドイツ民族に押しつけようとする勇氣を奮い起こしていなかったとしたならば、この運動もドイツ民族生存上、真に偉大な出来事とみなされようとする権利をもち得なかったことだろう。さらにまた内部の改革運動が強力になるほど、ドイツ民族が食べていく分の食糧基盤を確保するための外交活動が成功しないならば、永